

バラのアザミウマ類に対する摘花の徹底と殺虫剤の併用による防除効率の向上

[要約] 施設栽培バラにおいて、摘花によってフルフェノクスロン乳剤は、ミカンキイロアザミウマとヒラズハナアザミウマに対する高い防除効果が長期間持続し、アセタミプリド水溶剤は、ヒラズハナアザミウマに対する防除効果が高くなる。

農業総合センター園芸研究所

1. 背景・ねらい

施設栽培バラにおいて、ミカンキイロアザミウマは殺虫剤抵抗性と殺虫剤のかかりにくい花への寄生などにより防除が困難な害虫であり、さらにバラでは本種に対する登録薬剤は少なく、新たな抵抗性の発達が懸念される。また、バラではヒラズハナアザミウマも恒常的に発生し、殺虫剤の使用回数も多く、抵抗性の発達と環境への影響が懸念される。そこで、これらのアザミウマ類に対して、殺虫剤の効果を向上させ、殺虫剤の使用回数を削減できる有効な防除法を確立する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 施設栽培バラにおいて、開花した不要な花の摘除を行わない場合（無敵花区）と比較して、開花した不要な花の摘除を随時行う（摘花区）と、フルフェノクスロン乳剤散布後のミカンキイロアザミウマ成虫数、ヒラズハナアザミウマ成虫数及びアザミウマ類幼虫数は少なくなり、高い防除効果がある（図1）。また、摘花区では、フルフェノクスロン乳剤散布49日後（9月18日）まで、2種アザミウマ成虫数及びアザミウマ類幼虫数は少なく、摘花を続けることによって防除効果が持続する（図1）。
- 2) 無摘花区では、アセタミプリド水溶剤散布後にアザミウマ類幼虫が残るが、摘花区では本剤散布後のアザミウマ類幼虫数は極めて少なく、高い防除効果がある（図1）。なお、このアザミウマ類幼虫は、成虫の発生状況からヒラズハナアザミウマの幼虫が主体であると推測される。
- 3) ヒラズハナアザミウマ成虫に対して、摘花区でのアセタミプリド水溶剤第2回散布10日後（10月28日）の補正密度指数は15.2と低く、無摘花区と比較して、防除効果が高い（表1）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 摘花は、施設内全体で徹底して行う。
- 2) 摘花した花にはアザミウマが生息しているので、花は速やかに土中埋没又はビニール袋での密封などの処分を行う。

4. 具体的データ

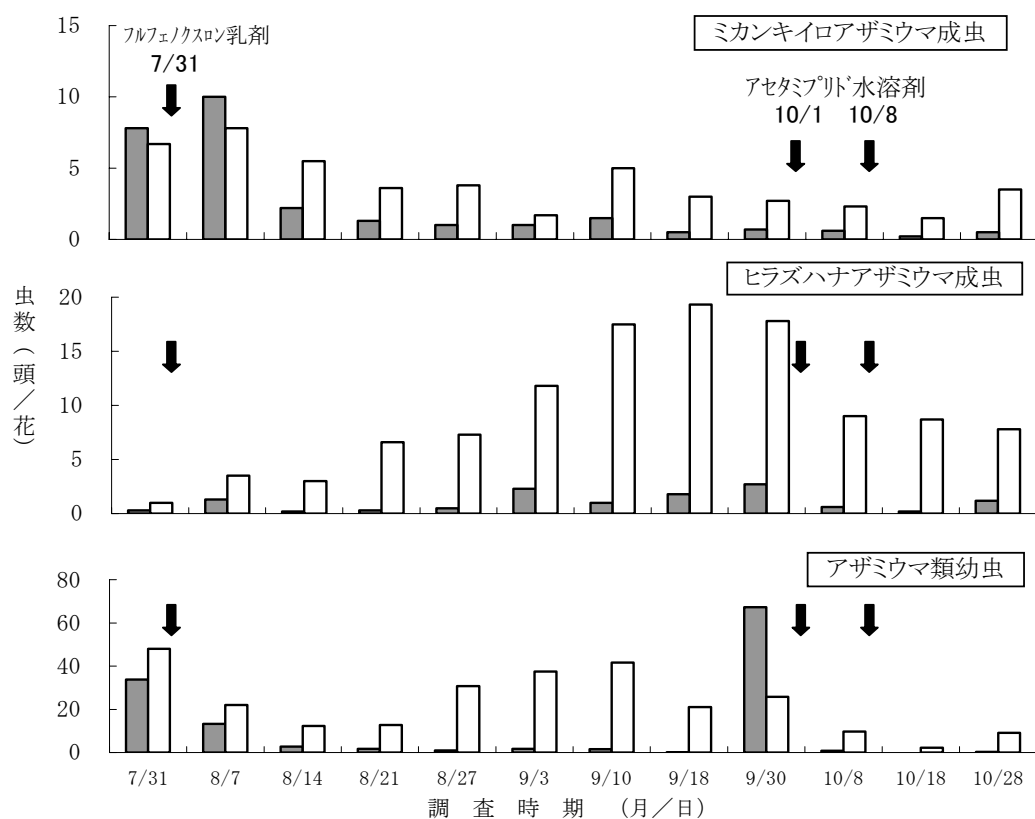


図1 施設栽培バラにおける摘花区と無摘花区の花でのアザミウマ類の寄生虫数の推移
 (■ : 摘花区 □ : 無摘花区 ↓ : 殺虫剤散布時期)
 ※9/30の摘花区でのアザミウマ類幼虫数の増加は、無摘花による生息環境の悪化で無摘花区から幼虫が移動したためと思われる。

表1 ヒラズハナアザミウマ成虫に対する摘花とアセタミプリド水溶剤散布の防除効果

試験区	1花当たりの成虫数 (頭/花)				補正密度指数※		
	第1回散布		第2回散布		第1回散布	第2回散布	
	1日前 9/30	7日後 10/8	10日後 10/18	20日後 10/28	7日後 10/11	10日後 10/18	20日後 10/28
摘花区	2.7	0.6	0.2	1.2	44.0	15.2	101.4
無摘花区	17.8	9.0	8.7	7.8	100	100	100

※補正密度指数 = $\{ (T_a \times C_b) / (T_b \times C_a) \} \times 100$

T a : 摘花区の散布後の虫数

T b : 摘花区の散布前の虫数

C a : 無摘花区の散布後の虫数

C b : 無摘花区の散布前の虫数

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

施設主要花き類におけるミカンキイロアザミウマ防除技術の確立

平成10年～14年

病虫研究室